吉田稔麿ら四人を実例に
松陰教育の現場を復元

松陰先生の教育力

広瀬　豊著

マツノ書店

限定三八〇部復刻

吉田松陰　安政五年の筆蹟
「示諸生」より

入江九一　安政六年の筆蹟
「建白書草稿」より
（入江遠編『入江九一資料集』）

日　次

第一編　松陰先生の教育力
第一節　松陰先生と吉田栄太郎……三
第二節　愛弟子入江杉蔵……九三
第三節　村塾の功労者久保清太郎……一二七
第四節　松門の柱石小田村伊之助……二九九
第二編　松陰研究の諸問題
第一節　教育者としての寛情……三五三
第二節　再び国賓寇遠高杉晋作を訪ふ……三五六
第三節　門弟被山舞太郎の村塾回想録
（陽明学的修養）……三六三
第四節　松下村塾の学風……三六八
第五節　吏師書簡法……三八二
第六節　乗船潜入及印章の研究……四〇一
第七節　字と號……四一二

■体　裁　A5判　四三〇頁
クロス装上製箱入
■定　価　一万円（〒450）
■予約特価　八千円（〒サービス）
三点セット特価あり
■特価締切　12年2月10日
■発　売　12年3月10日
限定三八〇部（番号入）
▼直販につき書店卸不可

徳山市銀座二の一三
☎〇八三四(二二)九五　マツノ書店

内容見本

持つてゐる、彼の本性に頑固な處がないからだ。要するにわしに藥になる人物は此高杉・久坂・榮太の三人である。……而してわしの最も愛する人物は岡部と榮太だ、榮太は其才を愛し、岡部は其元氣の鋭い處を愛する。然し是等は皆自分に似たる點を愛するので、わしの缺點だ、榮太の頑固な處にはわしは負けた、あれは到底直らんだらう……

松浦は才もあり氣もあり、一種面白い男だが榮太の見識には遠く及ばない。けれ共實用には松浦の方が役立つだらう。増野は松洞・榮太より一枚下だ。然し着實の性質で氣魄もある。だから大切な時機に道を誤る事はあるまい。……』

と、松陰は實によく人を見て指導した。此文を見てもよく榮太の長短を見拔いて居る。而も榮太は餘程見込のある男と考へて居る。だから又其缺點に對する忠告も説諭も猛烈にして徹底的である。遠慮會釋なく眞向からやりつけて居る、其代り榮太もなか／＼負けては居ない、頑張り屋である。其點では榮太の方が強い。だから松陰はいつも榮太には負けたと云つて居る。今回の無言の行にも矢張り師匠の方が遂に根負けしてしまつた。

二月十二日と云へば松陰が入江と折角要駕策の相談最中の場合だ、而して他方相變らず諸友門弟を思ひ出しては憤慨し激勵し或は罵倒して居る。榮太は一月廿三日の松陰の書を受取つても相變らず何の返事も出さない。松陰は愈々あせつて入江や岡部・品川等に榮太はどうして居るのかと聞いても見たらしい。或者は「榮太は近頃はまるで魂が拔けて居る」とでも云つたと見える。松陰は「それはけしからぬ」とあつて早速一書を認めた。

『無逸の心死を哭す（榮太の精神が死んだのを悲む）

古語に世の中に何が慘だと云つて精神が死んだより可哀さうな事はない、古の聖人賢人等は此反對で身體が死んでも精神は永久に生きて居る、今の下等な人間は身體が死なぬ中に心が死んでゐる、哀れなものだ、世人は肉體の生死を以てさも大事件の如く考へてゐるが、精神の死生の如何に重大事件なるかを知らぬ、だから今わしが榮太の精神が死んだと云つて慟哭する有様をも想像もつかんだらう、如何にも殘念な事である。……

無逸の奇才は希に覯る所　膏粱の仁義に久しく困餓す　人間の慘心死に如くはなし　今日而の爲に雙涙を揮ふ』と、此文の眞意は同日松陰から入江・岡部に宛てた手紙によく述べてある。曰く

「……午後頭痛にて一睡仕、無逸無端入夢來、醒後又々感辭を發し落涙難禁候、余年少竹馬の交は今に至り志を同くするもの淸太一人なり、其他は皆々隔絶、併是は其時、今とは吾も學問識見一變致し、時勢も不同に付昔の同志今の同志に非ざるはいかんせん、丑寅以來今日までは都合連續

内容見本

吉田松陰の「教育力」

北海道大学名誉教授　田中　彰

最近は「老人力」という言葉がもてはやされている。「老人」に「力」という文字を付すことによって、そのパワーを強調しようというのである。

昨今の教育界の現状をみると、やがて「教育力」という語が叫ばれはじめるかもしれない。その「教育力」を書名のタイトルにしているのが本書である。

本書の初版本が出版されたのは、一九三四年（昭和九）である。満州事変（一九三一年）と日中戦争（一九三七年）の中間の年に当たる。それはワシントン海軍軍縮条約破棄を日本がアメリカに通告した年でもあったから、新たな「教育力」を必要とする情況だったのだ。

著者広瀬豊氏（一八八二～一九六〇）は、海軍兵学校・海軍大学を卒業し、正規の海軍軍人だったが、教育学に関心をもち、その関心の焦点を吉田松陰にしぼった。『吉田松陰の研究』（正続合わせて復刻版、マツノ書店、一九八九年）をはじめ多くの松陰に関する著作を公刊しているが、本書はこの著者の松陰基礎研究の一部を成すものである。

本書は、吉田栄太郎（稔麿）・入江杉蔵（九一）・久保清太郎・小田村伊之助（楫取素彦）らを中心にとりあげている。そこに松陰の「教育力」を具体的にみようとするのだ。その中の一人入江九一は、松門の弟子たちが松陰から離れようとしたときも、最後まで松陰のもっとも身近なところにいた。

『吉田松陰全集』普及版、第十二巻所収の「関係人物略伝」は、松陰と入江との関係を、「肝胆相照し」といい、入江は「松陰を篤信し、その精神を継承せんとする志に於いて最も純なるものありき」と述べている。

本書は、その端的な表象を入江九一の筆蹟に見てとる。松陰の文字にもっともよく似ているのは彼であり、「何れが本物か迷ふ場合がある」と記す。事実、安政六年（一八五九）の入江の筆蹟は、松陰の筆蹟そのものなのだ。

入江九一の筆蹟の流れをみると、安政五・六年、とりわけ安政六年をピークにして松陰の筆蹟に酷似し、松陰刑死後から文久期にいたるとしだいに松陰風から遠ざかる。元治元年（一八六四）の筆蹟になると、もはや異筆の感すら覚えるような変化がみられるのである。

それこそが「教育力」の結果のあらわれではないのか。

本書によって吉田松陰の「教育力」を改めて確認していただきたい。

■改めて紹介するまでもないことですが、吉田稔麿は高杉・久坂と並んで、いま最も人気の高い志士です。入江九一は野村靖の兄。久保清太郎（断三）は吉田松陰の親戚。小田村伊之助（楫取素彦）は松島剛蔵の弟で、久坂の妻であった松陰の妹・文が再嫁した人でもあります。

■本書は「新しい材料を発見し、新しい考えに達するごとに、絶えず前説の誤りを訂正する。それが学問の進歩だ」（本書序文）と力説してやまない著者の『吉田松陰の研究』『続吉田松陰の研究』に次ぐ第三弾です。前二著は一冊にまとめて小社で復刻し、すぐ売り切れました。

■今回の復刻に際し、田中彰氏による十一頁に及ぶ「解説」を新たに付すと共にB6判の原本をA5判に拡大します。